

小池辰雄記念図書室だより

2015, 8. 10 (月) NO. 26 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

1. 各地の読書会

「読書会に参加して」

星 貞子 (いわき)

「懐かしい」と最初に感じました。初めて参加する読書会は高校の時の国語の授業のようで、私は自分の高校の教室にタイムスリップしたような不思議な感覚でした。しかし、老若男女さまざまな参加者は皆真剣に講義を受けており、高校の授業のように居眠りなどしている人はだれもいませんでした。「こんな授業は受けたことがない」と思い、また「こんな授業を受けてみたかったな」と心から思いました。

読む本は『無者キリスト』。その日の講義は、宗教と文化、のところでした。この中に、聖書について記してある部分があります。

「聖書というものは、教訓の書でもなければ、単なる歴史でも物語でもない。それは神話や物語や歴史を通して絶対的次元が相対的次元に投じてきた啓示の書である。(～中略～) 読者は、ドラマの中に自らを投入して、ドラマの中の活人物となって、体で読まねばならない」とあります。

水谷先生が言われる、聖書の真理によって現実を生きる、ということと重なっていると思いました。私が聖書を買って読み始めたのは1年前くらいからですが、聖書を自分で読んで理解するのは難しいと感じています。この本では、「聖書は暗号でもある」と著者は言っています。頭をかなり柔軟にしなければならぬと思わされます。

しかし、水谷先生の解釈によって聖書の内容を現実生活にあてはめることができ、常に現在の自分に置き換えて考えることができます。神様の御思いは何なのか、これは自分の思いなのではないのか、自分はどうするべきなのか、など聖書によって学ぶ日々です。

今回、この読書会の感想を書く使命を与えられ、再度『無者キリスト』を開きました。改めて読んでみると、読書会の時は難しいとしか思えなかったところが、とても面白いことがわかりました。それで、本を購入しました。(読書会の時は借りていたのですが…) また、ぜひ参加したいと思っています。ありがとうございました。

2. 『無者キリスト』から『聖書の人ルター』へ

都賀と余市ではもうすぐ『無者キリスト』を読み終わります。次のテキストは、『聖書の人

ルター』になります。2017年は宗教改革から500年の年です。どうぞご期待ください。テキストは図書室にて¥2,000で販売しております。



小池辰雄著作集第七巻『聖書の人ルター』



「琴を弾きながら自作の讃美歌を子供たちと歌うルター」

小池辰雄を読む会

●余市

2015年9月6日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌

2015年9月5日(土) 14:00~16:00

(札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家)

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(三ツ木)

●関西

2015年10月25日(日) 14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸パイブルハウス

*自由献金 *連絡先:090-4645-7389(後地)

●都賀

2015年8月22日(土) 10:00~12:00

2015年9月19日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

図書室だよりは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。



揺さぶられた事件

「一人の可憐な精神病患者が、医術をあざけり、神癒をあざけるがごときサタン的な魔力に翻弄されて、信友の愛の祈りにもかかわらず、その身を犠牲にした悲しい出来事が、今秋、東京都北多摩郡清瀬村の一角にあった。」

と、これは「誰か責め得る」と題し、清瀬事件のことを書いた小池辰雄主筆・『曠野の愛』誌の第18号（昭和27年12月）の記事である。昭和27年には、辰雄は月1回の日曜日、武蔵野幕屋の集会を終えてから、福音伝道の講演のため、清瀬の東京療養所の講堂に通っていた。手島郁郎も、その年は熊本から3回も、東京療養所を訪れていた。小池・手島の靈的な祈りによって結核患者が次々と癒されていた。

聖霊にある「いやしの賜物」については、パウロがコリント前書十二章九節の中で言っている。この悲しい出来事の三日前に、熊本から派遣されてきた手島郁郎の弟子・吉村騏一郎は、聖霊による「いやしの賜物」をもって、東京療養所の一人の精神病患者・植木エミさんを正気に返すため、日夜介護に当たっていた。そして、夜を徹しての祈りの場で、事故は起きた。

狂乱を鎮めようとした吉村を振り切って、エミさんは鍵のかかった二枚のガラス戸を引き倒し、めっちゃめっちゃに壊れたガラス戸にしがみついた。その上から吉村らが覆いかぶさり、ようやくのことでエミさんは静かになった。これで悪鬼が出てくれたかと胸をなでおろし、「さあ、植木さん、感謝の祈りを捧げてください」と覗き込むと、その顔には輝きがなく、苦悶状を呈していたという。さらに祈り続けるうちに、エミさんは次第に静かになり、脈拍を見た時にはすでに事切れていた。

じつはこの状況説明は、事故の現場に居合わせた方の話を、東京療養所の一人が、辰雄宛、「即日速達」で送ってきた手紙の一部である。

これまで誰も経験したこともない異常な事故だった。吉村らは過失致死の疑いで取り調べを受け、20日間留置された後、起訴された。直接の死因は、エミさんの狂乱を抑えた時の非常な力による内臓出血か、それともエミさん自身の極度の衰弱による心臓衰弱死か。新聞・雑誌は、手島の率いる幕屋の信仰を邪教とまで呼び、手島郁郎と小池辰雄は全キリスト教界から異端視され、無教会から断絶することになった。結局、最終公判で吉村らは無罪となったのだが。

1952年3月曠野の愛社看板

辰雄は、前述の『曠野の愛』第18号に、こう述べている。

「信仰的な善意と愛の行為が、靈界の劇闘に耐えかねて敗退し、夢想だにし得なかった現実直面したのであってみれば、誰かこの信友の信仰の境地を審き得ん。誰か責め得る。『われも汝を罪せじ』（ヨハネ伝八章十一節）と言う、深いあがないの審判が、天上から聞こえてくる。主はこの信友の心腸（はらわた）を知りたもう。友らよ、主の愛の中に居（お）れかし。主キリストが自らその全部を引き受けてくださるあわれみである。十字架の愛からひびき来たるみ声である。パリサイ的な基督教界の諸方面からの審判、罵詈雑言、誹謗、曲解、白眼視、来たらば来たれ。父のみ許に悔い泣く心。十字架の下に砕けたる魂。キリストのみ霊、彼らを引き返し給うた。その胸に新たにみ霊を賜いて」と。

靈の世界にあっては、「穢（けが）れし靈の住む人」とか、「悪鬼に憑（つ）かれた者」というような存在が、福音書や使徒行伝に記されているように、現に今もある。ただそれが、異常な現象が起きるまで、気づかれないまでである。精神病患者に限らず、いかに人間はサタンに左右されているかを知るべきだということであろう。

一方、手島郁郎は、この事件のあと、『生命の光』第37号に、こう書いている。

「私は思うに、彼ら（吉村ら）はサタンをなめてかかったからではなからうか。人間の熱心や熱禱によりたので、神意に聞かなかつたのではなからうか。しかり、そうだと思います。主イエスですら、四十日四十夜の断食中に、サタンに試みられ、これと必死で闘っておられる。サタンは、ときとして神の民を篩（ふる）い、試みることを神から赦されている…この事件は靈闘事件です。神はすべてを知りたもう。神がパラクレオトス（弁護人）として助け給います。」と。

『わが師 手島郁郎』
(吉村騏一郎著) P.225
「愛の悲劇」参照



1953年初夏辰雄2階ベランダにて